

田中 秀央 校注『クセノポーン アナバシス』
鳴瀬 恒太郎『ギリシア語文法』

水谷 智洋

大学4年生のとき、私は支離滅裂な「転向」を決意しました。突然、古代ギリシア語の勉強がしなくなったのです。そのため、まず第1段階として、本郷の文学部から駒場の教養学科へ教えに来られていた斉藤忍随助教授（当時）の「ギリシア語」に顔を出しました。すると幸運にも、先客がひとりだけいましたがその学生もまだ初級をすませていなかったの、本来は講読のクラスであったのに、あの大先生が私ども2人のために、岩波全書の『ギリシア語入門』を使ってA B Γからの手ほどきをして下さったのです。

こうして大学での贅沢きわまる手ほどきが少し進んだ頃、下宿では、Colson's Greek Reader (Macmillan, 1888) のやさしく書き直した文章を通じて、ギリシア語への親しみを深めようと努めました。そしてこの読本をすませると、なんと、田中美知太郎校注『プラトン ソクラテスの弁明』（岩波ギリシア・ラテン原典叢書）に立ち向かったのです。私はこの本を、大学5年生の終わり頃、大学院を受験するまでに、2度、目を通してはいますが、原文も注釈もいまひとつ（本当は「ひとつ」どころではなかったはずです）ピンと来ませんでした。要するに、全然、初学者向きではなかったということなのです。

その点、同じ岩波の原典叢書でも、田中秀央校注『クセノポーン アナバシス（第1巻）』は、大違いでした。入試の数ヶ月前に買い求めたこの本（1950年発行のこの書物が、1962年暮れに神田の岩波図書販売で新本として購入できたのです）を、私は1ヶ月で読み了えています。たんと事態の推移を語る素直な文章、要点のみを記した注釈、まさに初学者向きです。残念なことに、今、この本は入手不能ですが、表記を新仮名、新漢字に改めて再版されたら、初学者の大歓迎を受けるに違いありません。

昨年9月に届いた「書評文献リスト」のなかに、「鳴瀬恒太郎『ギリシア語

文法』1933年、東京、尚文堂」の名を見つけだしたとき、ずっと以前にこの本をどこかの古本屋で買い求めた記憶のある私は、若い方々はこんな古い本は御存知ないだろうから、紹介の労をとってみようかと、ついうかうか、その旨のハガキを出してしまいました。そして今、後悔しています。後述するような理由で、自らが最も不適切な紹介者だ、と気付かされたからです。でも、仕方ありません。ごくごく簡単な紹介文をづつることによりその責を塞がせていただくことにします。

本書は、題名こそ『ギリシア語文法』と名乗っていますが、いわゆる文法概説書ではなく、まぎれもない古代ギリシア語の入門書です。ちょうど、本書に先行する唯一の類書、田中秀央『希臘語文典』(1927)がそうであるように。(ついでながら、田中美知太郎「ギリシア文法提要」(1931)は単行本ではありません。)そこでその内容は、と行きたいところですが、その前に本書の著しい外見的特徴をあげておかねばなりません。それは、本書では、緒言、目次の各3頁と奥付けを除く234頁と扉が、すべて手書きの版下を用いて印刷(あるいは孔版印刷?)されていることです。しかもその手書き文字は、和・英・希のいずれをとっても、実にみごとで、しかも読みやすいと来ていますから、写字生――ひょっとしたら筆者自身でしょうか――の技倆たるや、たいしたものと言う他はありません。

さて、肝心の内容です。私も紹介者の役をつとめる手前、初学者になったつもりで、本書のいくつかの練習問題にあたってみました。困ったのは、大抵の入門書の巻末についている語彙が本書にないことです。となると、初学者は――希英辞典を所有しないとしましょう――練習問題の直前にある「語集」に頼らざるを得ません。ところがこの「語集」、いかなる基準で単語を収録しているのか、また、いかなる原理で単語が配列してあるのか、一向に定かではなく、本物の初学者を困惑させたであろうことは疑いありません。

最後に、これが本書の最大の特徴でしょうが、練習問題に採られている文章は、大半が新約聖書からのものです。とはいえ、文法事項の説明は、多くは古典ギリシア語に範をとって行われていますから、著者の企図は、古典ギリシア語をしっかり教え込んだうえで、新約のそれをも修得させようという、きわめて野心的なものであったのかもしれませんが。しかしながら、その試みがどの程度成功しているかの判断は、新約に暗い私などのよくするところではありませんから、しかるべき資格者の救援をお願いする他はないのです。冒頭に、「自らが最も不適切な紹介者」と記した所以です。